

上からの改造計画ではなく、被災者一人ひとりに沿った復興を

——東日本大震災の被災地で見聞きしたこと——

新建復興支援会議 鎌田一夫

(住まいの研究所)

私は住宅公団にいた頃、仙台鶴谷ヶ谷団地のタウンハウスの設計を担当して年に何回か仙台に出張した。東北第一の大都市でありながら広瀬川が流れ青葉城の森が迫る。住む人も素朴さを残しており、好印象が残っている。その仙台が被災したとあって何かしたいと思っていたところ、たまたま新建の復興支援会議のまとめ役をやることになり、先遣隊として4月6日から9日まで仙台を中心に被災地にお見舞いに伺い、いろいろな人たちと話をしてきた。

複合災害が高齢化した広範な地域を襲う

塩崎賢明氏が指摘するように、東日本大震災では地震、津波に加えて原発事故も発生、地震も揺れによる建物被害だけでなく地すべりや液状化を誘発しており、まれに見る複合災害である。被災地も北は青森県から南は千葉県に及ぶ広域で、その中には高齢化が進んだ中小の都市や集落が数多く含まれる。

こうした、まさに未曾有の災害から復興するにはこれまでの土地所有や利用を抜本的に改めたまちづくりが必要といった論調が目立つ。しかし、復興時の区画整理や再開発で多くの被災者が泣きを見た例は枚挙に暇がない。広域で多岐にわたる復興だからこそ、一人ひとりの状況と希望に沿った復興を社会が支援していく必要がある。

宮城県の被災状況

今回訪れた宮城県での被害は大きく次のようになる。第一は平坦な海岸部での津波被害、第二はリアス式海岸での入り江や河口の津波被害、第三は丘陵住宅地での地すべり被害、第四は地震による建物とインフラの被害である。まず、第三、第四の被災について簡単に報告する。

繰り返す丘陵地の地すべり被害

地すべりが起きたのは丘陵を宅地開発した住宅地である。仙台市は広瀬川の西側の丘陵地に多くの住宅地が広がっている。旧法時代のスプロール開発、区画整理、新住宅地事業など様々である。何故中心部の東側の平坦な地域に住宅地が広がらなかったのだろうか。新建宮城支部の阿部さんは「農地転用が難しかったのではないか」という。

視察したのは太白区の緑ヶ丘地区。スプロール開発地で、ひな壇造成のため切り土と盛り土が交互にあり、盛り土部分が滑ったように見える。1978年の宮城県沖地震でも被害があった地域である。この辺りはアップダウンの多いところで高齢者には厳しい。今後は空き家も増えていくであろう。安全対策と共に住環境整備を息長く続けていく必要がある。

津波被害に隠れて地震による建築被害は少ないように思われているが、仙台市営住宅やUR住宅では居住者退去や用途廃止（再利用なし）が行われており、仙台市だけでも4,000近くが全壊している。ただし、長周期の横揺れだったためか、阪神震災のように圧壊した住宅は少ない。柱のせん断破壊が多く、変形に追従できないガラスや外壁材の破損・剥離、集合住宅では雑壁のひび割れが目立った。

汚水処理場の被災

仙台市内でも電気、ガス、水道のインフラが被害を受けた。私たちは地震の3週間後に行ったのだが、電気と水道はほぼ復旧し、ガスが半分程復旧という状況だった。しかし、公表されていないらしいが、下水処理施設（市に3ヶ所）が津波で壊滅的被害を受けている。沈殿させた上水を放出しているという。放射能汚染水の放出とは問題の質が違うが、公共インフラの立地や防災設備が再検討を迫られている。

居久根のある美しい田園の津波被害

平坦な海岸部の津波被害では仙台市宮野木区の荒浜地区と名取市の閑上地区を見た。TVで繰り返し報じられたように、一面津波になぎ倒されて瓦礫の山である。同行した若い新連合会は、余りの悲惨さに暫く車を出ることが出来なかったという。

この辺りの仙台平野は居久根と呼ばれる屋敷林のある農家が点在する散居村であった。地元発信のサイトには次のような紹介がされている。

<北西の風をさえぎる居久根かな>

若林区の東部、平坦な地形の中にある若林の農家は風雪を遮る物がない。冬は北西の強い季節風、以前の茅葺屋根などはひとたまりもない。この暴風雪から守ってくれる防風林、屋敷林が居久根である。（イグネ）遠くから眺めると、居久根はまるでたんぼのなかの緑の小さな森。夏でも適度な日陰を提供してくれるし、樹木は平地での燃料をも提供してくれるし落葉は堆肥として有機肥料となる。主たる目的は防風であるが樹木には桃、梅、梨などの果樹、建材としての樺や杉その樹間に野菜の栽培、樹木の根元には秋にきのこなど、居久根屋敷を流れる小川は周りの田んぼとは違った豊富な魚類の生息。自給自足はひとつの居久根文化を形成している。屋敷林に囲まれた中は独特の建物配置が夫々の居久根にあって、この地方の村落共同体を形成している。

宮城県知事はこの地域の復興では、稲作に限らず園芸や酪農を振興したいと言っている。どのような農業を営むかは住民の皆さんがこれから決めていくことだが、居久根文化を継承した営農が出来ないものか。例えば、海岸から少し奥まったところに、避難建物を兼ねた5階程度の集合住宅を点在させる。その敷地は少し嵩上げし、周辺を屋敷林で覆い、それまでの自給自足型の生活を出来るだけ継承する。住まいの集合だけでなく、営農の集約化も図る。上からの集約化は問題だが、仙台には震災で亡くなられたが集約農業を推進してきた方が居たと聞く。海水を被った田んぼの復旧は時間が掛かるだろうが、居久根のある集住で力を合わせた復興を期待したい。

リアス式海岸の入り江にある集落の被災

新建宮城支部の佐々木さんは石巻市の十三浜地区に自宅と設計事務所を構え設計の仕事をしている。津波でRC造の1階を残してすべて流出した。十三浜は合併前の旧北上町に属する。

旧北上町は北上川の下流・河口から太平洋に面したリアス式海岸までの地域である。人口3,900人のうち301の方が死亡・行方不明、世帯数は1,151で半数以上の606戸が全壊という甚大な被害を受けた。佐々木さんが住まう十三浜はリアス式海岸の地区で、入り江毎に文字通り十三の集落が連なる。津波に対しては最も厳しい地形にあるのだが死亡・行方不明の方は北上町の他の地区より少ない。津波にどう対処するかを知っておられたといえる。

たまたま、被災した漁師の夫妻に話を聞いた。地震の後、ご亭主は船を守るため沖に出、お上さんは子供をつれて裏山へ。港の底が見えた第一波の後の引き波を見て、この3倍の津波が来ると思い、更に高い処へ避難したそうである。この気丈夫なお上さんが元の家には住みたくない

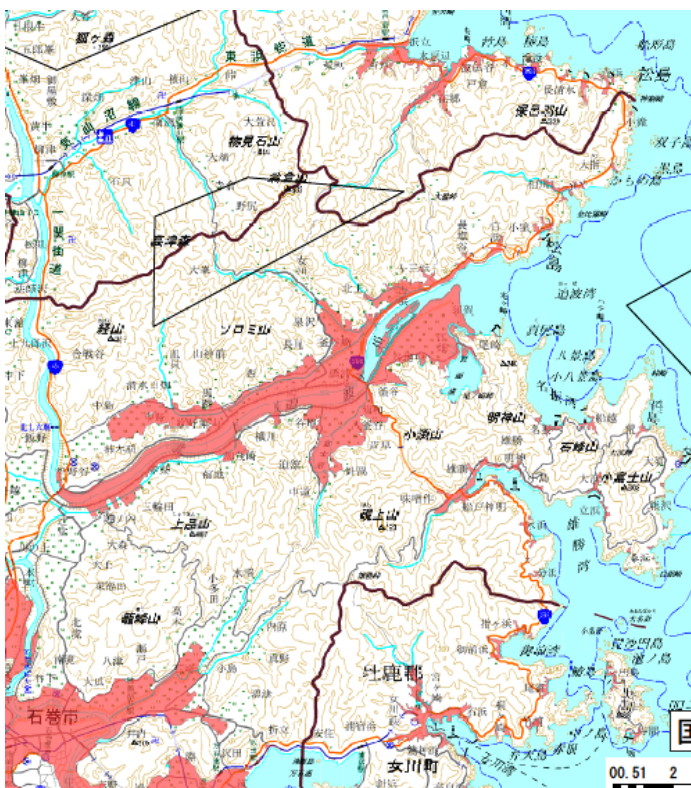
言う。津波の再来だけでなく、地盤沈下で海侵が進んで海が家の傍まで来たのが怖いのだ。高台に集団地を造って住みたいとおっしゃる。

集団地？ 昭和8年の三陸津波の後、十三浜の一部の人は高台に集団で移住した。そこは集団地と呼ばれ今でも住み続けられている。高台移住にはいろいろ意見もあろうが、現地の人は何十年もその実態を見た上で今度の選択肢はそれだと考えている。

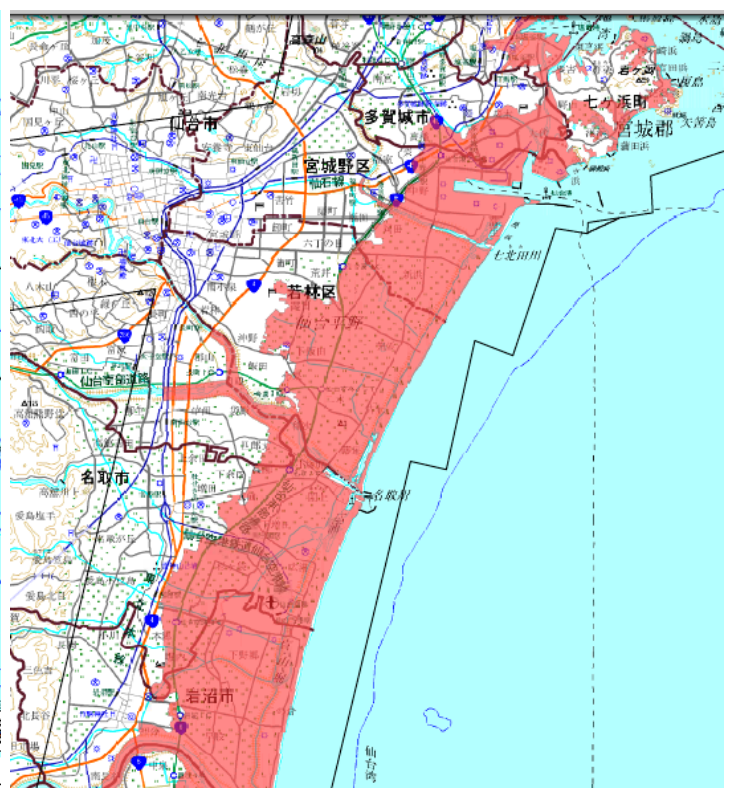
その集団地の少し上に避難所となった子育てセンター・保育園がある。そこで、地区長さんや元町議会議員さんの話を聞いた。「市が提示した仮設住宅は余りに遠い。子育てセンターの隣接地を少し切土すれば用地は確保できる。行政もここまで手は廻らないだろうから、自分達で出来ないことを支援してくれれば、十三浜には大工が30人はいるし設備屋もいるので後は何とかする覚悟はある。だが、一番心配なのは歯が抜けるようにこの地区を離れざるを得ない人が増えることだ。皆で再建したい。」

一人ひとりに沿った復興

机上で復興シナリオを考えていると、様々なケースに枝分かれして空中分解してしまう。しかし、被災地でお話を聞くと、当然のことながら一人ひとりが復興への希望を持っておられる。高所への移住といっても、モデル化が意味を持たない程集落によって条件が異なり、生業の復興もまた然りである。ひとつひとつの解決策を全て救い上げる社会的な支援策というと、理想論で現実味がないように思えるが、そうではない。復興の主力はなんと言っても被災者であり、被災者が心置きなく復興に取り組めるのが実は「効率的」なのである。公的な資金を大量に投入して、意に沿わない復興モデルに被災者をはめ込む愚は繰り返してはならない。



石巻市の津波による浸水範囲
十三浜は図の中央の北上川の河口から海に面した地域。北上川沿いはかなり奥まで津波被害が出ている。



仙台市・名取市の津波による浸水範囲
海岸から4～5kmまで、広範囲の仙台平野が浸水している。